

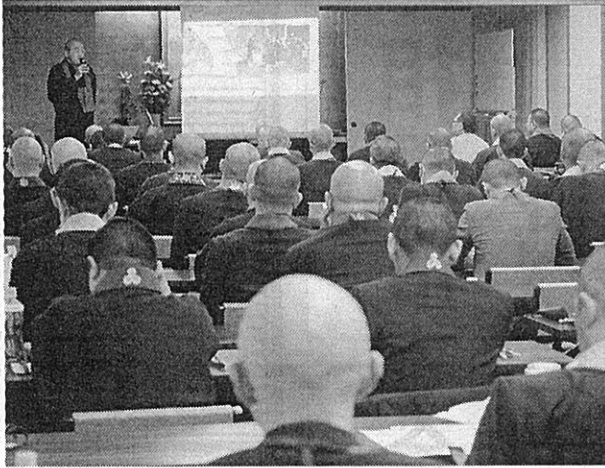
全青連 臨床宗教師講座を体験

苦の現場でのケア学ぶ

全真言宗青年連盟(全青連、岩田慈光理事長)の災害救援研修会「臨床宗教師養成講座・体験プログラム」が9日、港区の高野山東京別院で開かれた。様々な苦しみの中にある人々への積極的な関わり方を学ぼうと、各派から約90人が参加。布教を行わない宗教的ケアの方法を体験した。研修会の最後には震災物故者追悼法会を厳修した。

臨床宗教師を養成している東北大学の谷山洋三准教授と、臨床宗教師として在宅緩和ケアなどの現場で活動している高橋悦堂氏(宮城県栗原市・曹洞宗普門寺副住職)が講師を務め、超宗教による被災者支援活動や現在の被災地の課題等を講義。実際のケアに関するワークショップを行った。

五月女義信氏(豊山



熱心に講義を聴く青年僧侶ら

派)は「これからどのようにな被災者の方と接していけばよいのか、被災地に行くだけでなく、きちんと学んでおくことが大切だと思いました」と感想。「これからもこういう研修は積極的に受けたいですね」と語った。

内藤隆維氏(智山派)は「臨床宗教師」終末期医療のイメージでしたが、決してそうではないとわかった」と感想。「布教を目的とはしない臨床宗教師ですが、普段から檀家さんや信者さん、地域の皆さんとしっかりと接しているという土台がなければできない活動だ

と思います」と述べた。岩田理事長(高野山真言宗)は「被災された方に宗教者としてどう向き合ったらよいのか、以前から学びたいと思っていた。今日の研修会で、宗教者には影響力が

あるとお聞きし、もっと自信と自覚をもって(現場に)出ていっていいんだということがわかりました」と述べ、災害だけでなく、終末期医療や緩和ケアの現場にも積極的に出ていければと思う

おります」と話した。鹿野融真・全青連災害救援事務局長(高野山真言宗)は「非常時のみならず、お寺に來られた方との接し方等、改めて考えるいい機会になりました」と手応えを語った。